

# 「母子相互作用の臨床応用に関する研究」の評価

評価委員 中山 健太郎

本研究班は、心身障害研究のうち biosocial ないし psychosocial な分野を取扱っている唯一の研究班である。その内容は多岐にわたり、学際的であったり、方法論や結果から何が言えるかについて問題があることが、しばしばある。いくつか気のついた題目について感想を述べてみる。

Brazelton の新生児行動評価において、新生児行動のいくつかに人種差が見られ、また母親の神経症的傾向の影響が見られることは、生得と環境の意味付けと長期観察が問題になろう。

動物についての実験心理学的研究では、オタマジャクシについての研究が擬人的拡散思考を誘発し、サルやイヌでは、臨床的応用の拡散思考から遠い感があった。

1歳6カ月児の言語習得、都市幼児の住居環境と安全行動、共働き育児、自閉児の情報処理等の研究においては、発達刺激と児の反応の点から興味がある。親と子の個性と環境の係り合い、親子関係の質が問題になろう。

新生児の睡眠パターンの2題では、新生児乳児の生

活パターンの成立が何によるのか考えさせる。未熟児の行動発達、発達刺激についての研究は実用大切なことで、NICUでは、intact survival から長期発達、正常心理発達を考えてやる時期に入ってきているようである。

母子の顔の画像コンピューター処理解析は、人間の精神をどれだけ物理的にとらえることができるかということになろうが、いろんなデータを組み合わせてもらい、母子相互作用の有力な研究法の一つに発展してほしい。

肢体不自由児、小児心身症、発達遅滞児の母親についての調査は、調査法とデータ処理と対策について話し合いがあってほしい。

主婦の育児行動、母親の育児不安についての調査は、平均的日本人の態度を計ることになろうが、前者では背景となる価値観、人間観が問題となろうし、後者では個人的対策を考えてやらねばなるまい。

研究班全般として、臨床的応用の前に、目的志向的研究方法論の検討が大切のように思う。

